

## Chapter8：プライベート・ライズ，パブリック・ヒストリー

(Private Lives, Public History)

ーオーストラリア人の歴史意識をナビゲートする

小野創太（広島大学大学院） ([d200149@hiroshima-u.ac.jp](mailto:d200149@hiroshima-u.ac.jp))

### 著者紹介

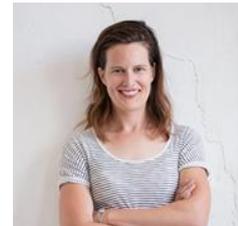
**Anna Clark**：シドニー工科大学フューチャー・フェロー，准教授。研究領域は，歴史編纂，歴史教育，パブリック・ヒストリー，記憶研究，歴史意識。

代表著書：

Macintyre, S. & Clark, A. (2004). *The History Wars*. Melbourne: Melbourne University Press.

Clark, A. (2006). *Teaching the Nation*. Melbourne: Melbourne University Press.

Clark, A. (2008). *History's Children: History Wars in the Classroom*. Sydney: University of New South Wales Press.



### 重要用語

- ・ historiography：歴史編纂
- ・ public history：パブリック・ヒストリー
- ・ historical practice：歴史実践
- ・ intersection：交差点
- ・ ordinary people：一般の人々

### 論点

- ・ 本調査の結果の日本との重なり，相違点は何か？
- ・ 専門家の歴史実践の営みをどのレベルまで一般市民に求めるべきか？

### プロジェクト設立の経緯，RQとその着想の背景（pp.113-115）

・ オーストラリアの歴史は，政治的・歴史編纂（historiography）的に大きな関心を集めている。  
→歴史家，政治家，一般の評論家がオーストラリアの過去をめぐって，興味深く，対立する論争を繰り広げている（Ex. 記念式典，博物館，学校のシラバス）。

・ こうした議論は，学術論文や意見記事（opinion pieces），パブリック・コメント（public commentary）などで論争や分析を刺激し続けているが，より広いコミュニティへの影響についてはほとんど知られていない。

◎いわゆる「普通のオーストラリア人」は，この国の過去についてどう考えているのか？

→Private Lives, Public History プロジェクトの考案へ。

**RQ**: オーストラリアの人々が、それぞれの地域や親密圏のナラティブの文脈の中で、国家の過去をどのように考えているのか、また逆に、公的な議論を支配する強力な歴史的言説の文脈の中で、人々の私的な歴史をどのように理解しているのか？

・プロジェクトにあたり、リューゼンの考え方を大いに参考にした。

→パブリックな歴史文化、家族やコミュニティの歴史的ナラティブ、公的な歴史教育の集合体としての歴史意識

グラスバーク:「歴史に関する考え方がどのように作られ、制度化され、広められ、理解され、時とともに変化していくのか」

☞現在を理解し、未来を予測するために、個人が過去をどのように意味づけるのかを説明するものであり、人間特有で、普遍的なもの。

・これまでのアメリカ、オーストラリア、カナダで実施された研究（セイシャスの前章で詳しく説明）において、誰が歴史を実践し、何が歴史的知識を構成するのかについて、専門家の理解を根本的に覆した。

→人々の日常生活から切り離された公的な国家のナラティブに対するコミュニティの関与が明らかに欠如している。一方で、人々は同時に歴史を熟考している（アシュトンとハミルトン:「過去志向 (past-mindedness)」)。

☞研究に参加した人々は、学校で学習した国家の歴史に直接関わることは難しいと感じていたが、彼ら自身の物語（ストーリー）や経験が過去との強いつながりを生み出していた（Ex.子や孫への伝承、家系図の作成、博物館やヘリテージ・トレイル、歴史協会への訪問、歴史小説やドキュメンタリーの消費など）。

○「専門的な歴史実践と『人々の歴史』あるいは『日常世界』における歴史」を分断されたものとしてではなく、可能性のある**交差点**として見なすことはできないのか？

**Q**: これらの異なるタイプの歴史が一緒になることはあるのか？もしそうだとしたらどのように？浸透した国家の過去の文脈の中で、人々は自らの歴史をどのように考えるのか？また、人々は自らの家族やコミュニティの過去に照らし合わせて、オーストラリアの歴史をどのように取り決める (negotiate) のか？

→このような問いが本研究の背景にあり、研究方法やアプローチの根拠となっている。

## 研究方法 (pp.115-118)

・プロジェクトは、従来行われてきた混合研究法に大きな影響を受けたが、それらを参考にしたわけではない。

・オーストラリア人が個人的・集団的な歴史意識をどのように取り決めているのかを理解するために、歴史的な会話 (historical conversations) に「耳を傾ける」ことを試みた。

→個別のコミュニティにおける親しみのあるグループへのインタビューを行うことに。可能な限

り真正な歴史的対話 (historical dialogue) を捉えるために、**大きな量的データを犠牲にすることにした。**

→「状況分析」(クラーク) 手法を用いて、「一般の人々」の声を公的な議論や言説と共にマッピングし、歴史的な関与や継承、記念、歴史的論争や場をテーマに熟考 (contemplating) した。

・地理的、文化的、社会経済的な多様性を広く反映した5つのコミュニティを選定。

マリックビル (シドニー郊外)、チャッツウッド (シドニー北海岸の富裕層が暮らすコミュニティ)、ブリンバンク (メルボルン外西部にある多文化かつ労働者階級が暮らすコミュニティ)、ロックハンプトン (クイーンズランド州中央部にある大きな田舎町で地域の中心)、ダービー (オーストラリア北西部の先住民が多く暮らす遠隔地の街)

→オーストラリアの人口からの無作為抽出ではなく、世代、学校、民族的背景、階級などが異なる参加者を意図的に集めた。

・スポーツクラブ、歴史・遺産協会、原生林再生 (bush-regeneration) グループ、アートグループ、高齢者センター、移民支援センター、若者グループなど、23のグループにインタビューを行った。それぞれのグループの平均参加者数は、4~5人。1時間程度の議論。合計100人と対話。平均年齢は49歳 (中年期や退職後にコミュニティグループやボランティア活動に参加することが多いため)。チャッツウッドとブリンバンクの2つの若者グループと、ロックハンプトンとブリンバンクの2つの大学の学生とのインタビューを行うことに。

・参加者のうち、男性は33人。家族やコミュニティの歴史を作る際には、女性の方が積極的に参加する傾向があった。チャッツウッドの男性の作業場のグループと話す機会を設けたり、男性と1対1でインタビューを行ったりすることに。

・先住民の割合が多く、全体の10%。先住民の歴史に大きく関わる公的な議論に対する彼らの反応を探るため。25%は移民。故郷や継承、国家といった考え方と関連して、歴史やアイデンティティの複雑さを明らかにするため。

→人種や階級、住む場所などが異なる人々の歴史に対する考え方の違いを明らかにする

「オーラル・ヒストリオグラフィー」。

●しかし…こうした小さなサンプルでは、様々な文化的忠誠心 (cultural allegiances) やアイデンティティのすべてを探ることはできない。LGBTIグループや宗教施設のメンバーへのインタビューは行っていなかった。キーとしなかったグループやアイデンティティの間で歴史意識の問題はますます顕在化してきた。

## 調査結果・考察 (pp.118-123)

・インタビューでは、これまでの研究で強調されてきた歴史意識の特徴が大まかに現れていた。

→全体として、日常的に深い歴史的つながりを維持しているが、一方で、より規定された遠い存在であると考えている、より公的な国家のナラティブには明らかに関与していない。(pp.118-119に詳述)

・プロジェクトでは、国家的なものや親密的なもの、公的なものと私的なものとのギャップを確認したが、いくつかの重要な交差点も発見された。こうした交差点は、過去に対する人々の関心が高まっているにもかかわらず、公的・公式なナラティブがその傍らで弱まる、これまでの解釈

を混乱させるようなものである。

事例①：「オーストラリア・デーのような歴史的な日には、どのような気持ちになりますか？」「過去とのつながりを感じますか？」@チャッツウッドの原生林保護グループ

ダニエル：もちろんです。素晴らしい記念行事だと思います。88年（創立200周年記念式典）は、港を歩いて渡れるほど素晴らしかった。感動的な一日でした。大きなパーティーだからこそ、魅力的だったんだと思います。

その歴史、あるいはその式典が理由？

ダニエル：うーん、オーストラリアが発見されたときにお祝いしていたという歴史があります。

ニック：あるいは侵略されたか。別の見方を求めるのであれば、アボリジニの主張には共感します。この日は祝うべき適切な日ではなく、別の日にすべきではないかと。

事例②：『盗まれた世代 (Stolen Generations)』（20世紀に歴代政府によって家族から強制的に引き離されたアボリジニ、トレス海峡諸島の混血の子どもたちの世代）への謝罪についてどう思いますか？」@チャッツウッドの男性の作業場でのグループ

ナイジェル：「盗まれた世代」で気になるのは、私が生きていた頃に起こっていたことで、私は何も知らなかったし、両親が何もしなかったことを政治的な意味で恥ずかしく思っています。

ロバート：彼らはそれが間違っているとは思わなかったでしょう。彼らは、その時に正しいことをしていると思っていました。

→時代を超えた歴史的エンパシーと歴史的判断の緊張関係。歴史戦争のような高い緊張感のある状況下で、日常的に歴史の主観性だけでなく、歴史的判断の難しさも理解している。また、互いの歴史的な見解の差異をこれほどまでに真摯に受け入れている。

・しかし、多くの学術的な歴史家はこれに警戒。「大衆の記憶では、プロの歴史家が誇る過去からの距離は、過去に存在することや、直観、見世物、娯楽の言語に取って変わられる。」(マッケナ)

◎だが、これらの歴史的領域は日常生活の中で絶えず重なり合っている。私たちが学校で学び、博物館で見て、集団で記念する歴史の影響は、同時に私たちの家族やコミュニティの歴史によって形成されている。また、歴史家、政治家、一般の評論家による過去をめぐる争いは、私たち自身の歴史的な主観を反映している。(その理由を示すことはできなかった)

・今回の調査の結果、様々な問題も浮き彫りに。(単純な歴史論争に対応しない深い歴史的多元性の存在をどのように考えるか？経験を通した過去とのつながりによって他の人々の「過去」や「物語」を傷つける歴史批評や尋問 (interrogation) を行うことになるのではないかと？自らとつながらない離れた、「つまらない」重要な歴史を市民がどのように学ぶべきか？)